

第1回 刻(とき)めぐりで橋守部に会いに行く

皆さんご存じの幸手校高の校章は、桜と橘の花弁がデザインされたものです。桜は有名な権現堂堤の桜ですが、橘の由来となった「橘守部(たちばなもりべ)」を知りたくて第1回目の取材に決めました。

現地に行つて、取材開始ボタンを押すと、歴史が動き出します。私は、歴史散歩「刻(とき)めぐり」。ちょうど歴史オタク、いや、編集室では堂々と「歴史」と名乗っています。古い街道を歩くのが大好き。寺社の由緒書きを読むのも好き。古地図と現在の地図を見比べるのは、もっと好き。そんな私が働く小さな「刻」編集室には、最近、とんでもない秘密兵器が導入された。その名も、「刻(とき)めぐり」。編集室

が開発した、歴史取材専用アプリです。スマートフォンに入れて、歴史上の人物ゆかりの地へ行く。現地です。プリを起動する。そして――「取材開始」のボタンを押すと現代の風景が一瞬で過去の姿に変わる。もちろん、ただのARではない。本当に過去へ行く。歴史上の人物本人に会い、直接話を聞く。そして取材が終わったら、「取材終了」ボタンを押す。すると、元の時代・元の場所へ戻ってくる。いつにわかに信じがたいアプリなのです。「本当に使えるんですか、これ？」初めて説明を聞いたとき、私は編集長にそう聞いた。「使えよ、君が行くんだよ」「え？」今回の取材先は、橋守部(たちばなもりべ)。江戸時代後期の国学者。幸手生まれではない。しかし、1809年(文化6年)、29歳のときに幸手の内国府間村へ移り住み、1829年(文政12年)まで約20年間、この地で暮らした。しかも、幸手で、自分の

号から名付けた「蓬壺庵(ほうこあん)」という塾を開き、人々に学問を教えていた。子供たちに手習いを教えていた資料もある。後に「天保の四大家」の一人に数えられるほど有名な国学者。直接取材に向かった。私はスマートフォンを握った。

【幸手へ】

私は幸手へ向かった。今回の目的地は、橋守部先生が暮らした内国府間周辺。スマートフォンには「刻めぐり」の画面が表示されている。取材対象、橋守部。時代、江戸時代後期。ゆかりの地、幸手、内国府間。「現地到着後、取材開始ボタンを押してくだ」という文字が出る。「なんだか、本当にタイムマシンみたい」私は笑った。とはいえ、頭ではまだ半信半疑だ。

現地に到着すると、アプリが反応した。対象地点を確認しました。橋守部の取材を開始できます。画面中央に赤いボタン。取材開始、私は深呼吸した。指が画面に触れた。

【文化6年、幸手】

風が吹いた。

次の瞬間、目の前から電柱が消えた。アスファルトも消えた。

住宅もない。

代わりに、土の道。

人々が歩いている。

荷物を運ぶ商人。

遠くから馬の音。

「……すごい」私は思わず声を漏らした。アプリの画面を見る。現在年代、文化6年(1809年)。「本当に来た……」幸手。

でも、二百年以上前の幸手だ。私は周囲を見回した。

この時代、幸手は日光道中の宿場町として多くの人々が行き交っていた。旅人が歩き、商人が荷物を運び、宿

場には人が集まる。現代の幸手とはまったく違う。けれど、土地の空気だけは、なぜか同じように感じられた。「橋守部先生は……」

アプリの地図に、小さなマーカーが表示された。取材対象者、近距離私は歩き始めた。

【橋守部に会う】

やがて、一人の男性が見えてきた。落ち着いた雰囲気。手には書物。私は恐る恐る声をかけた。

「橋守部先生、もしよつか？」

「はい。そうですか……」

画面越しではない。肖像画でもない。本当に目の前にいる。「私は遠方から来た物書きです。先生のお話を伺いたく」

「結構ですよ」守部先生は穏やかに笑った。「どう？」

私は心の中で叫んでいた。「取材アホ成功！」

【なぜ幸手に来たのですか？】

「先生は幸手生まれではないと聞いています」

「ええ」

「では、なぜ幸手へ？」

守部先生は街道の方を見た。

「人の往来があるからでしょうか」

「宿場町だから？」

「それもありません」

守部は続けた。

「人が集まるところには、さまざまな話が集まります。書物も、人の知識も、また同じです」

幸手は交通の町。

そして、文化の町でもある。

街道を通じて、人だけではなく情報も移動する。

「ここで学問をするには、よい場所だったんですね」

「そう思います」守部は静かにうなずいた。

【国学者・橋守部】

「先生の研究について教えてください」

「古い書物を読みます」

「どんな書物ですか？」

「『古事記』『日本書紀』『万葉集』などです」

守部先生は書物を開いた。

「昔の言葉を知れば、昔の人々が何を考へていたのかを知ることができず」

「言葉から心を知る？」

「そうですね」

私は現代の仕事の思い出した。今の私たちも、昔の日記、手紙を読んで、その時代の人の気持ちを想像する。一百年前の学者がやっていたことも、根拠の部分では似ているのかもしれない。

「先生は、本居宣長先生の学問も研究されたんですね？」

「先生の学問は大切です」しかし、守部はそこで言葉を止めた。

「ただし、先人が言ったことを、そのまま信じるだけではいけません」

「自分で考える？」

「そうですね」

守部先生は笑った。

「自分でも読んで、自分で考える」

「これが、守部先生の学問を理解するキーワードなのかもしれない。」

【幸手の「先生」】

「幸手では、塾も開かれていたんですね？」

「ええ。蓬壺庵(ほうこあん)と申します」

「どんな方が学びに？」

「近頃の者もいれば、遠方から来る者もいます」

幸手時代には国学研究だけでなく狂歌師を名乗る。幸手周辺だけでなく、桐生や足利の遠方の機業家の門人も得ている。私は驚いた。現代なら電車一本で来られる。でも、この時代は違う。学びたいという気持ちだけで、遠い道を歩いている。

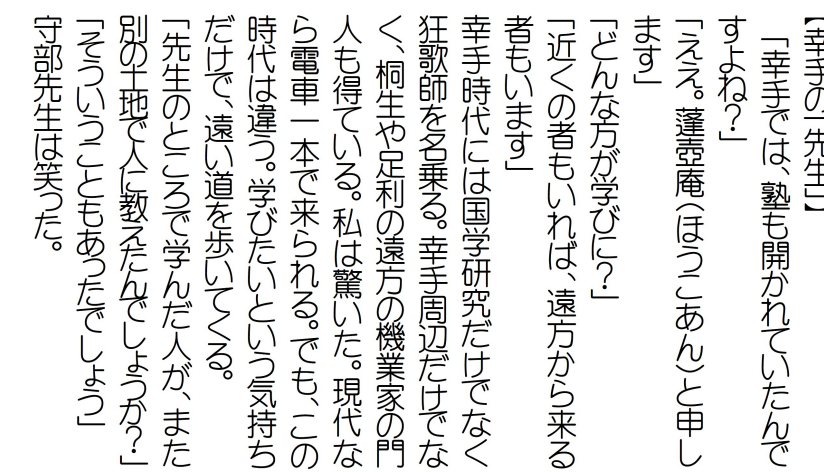
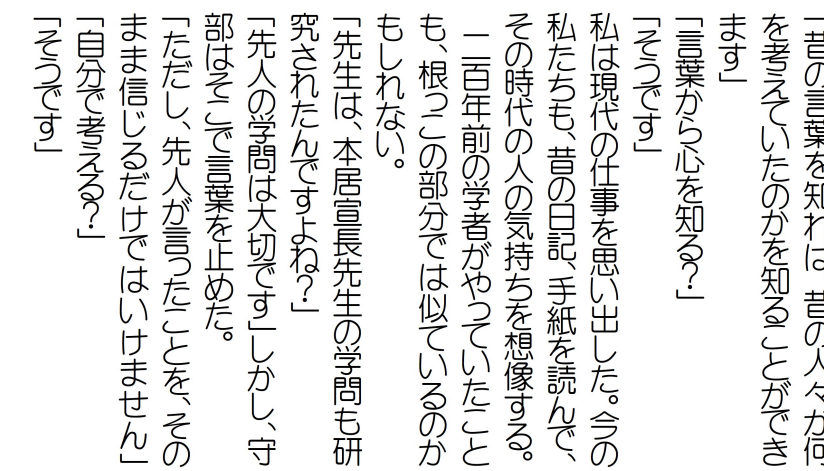
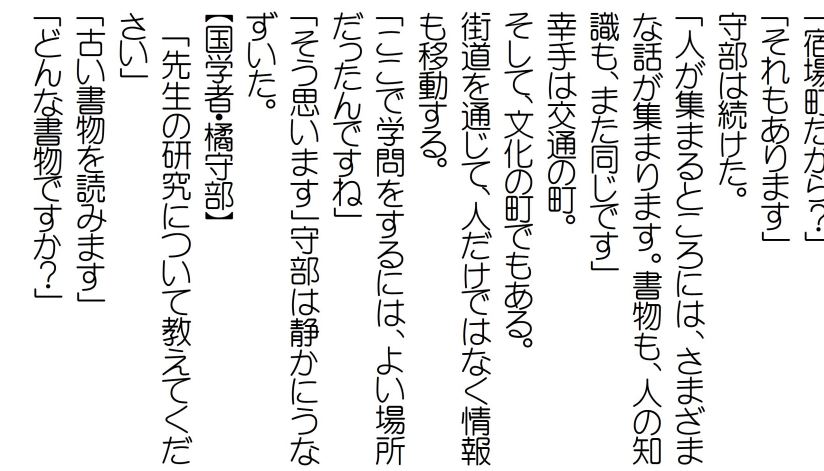
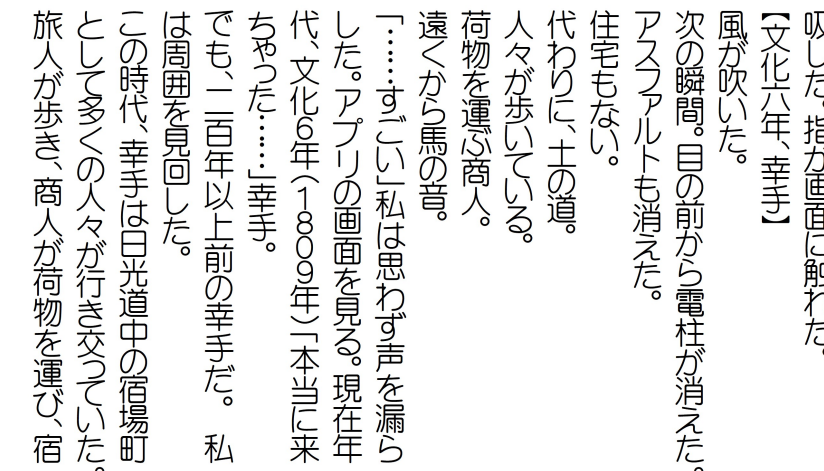
「先生のところで学んだ人が、また別の土地で人に教えたんでしょうか？」

「そうですね」

守部先生は笑った。

歴史散歩幸手かわら版

発行所：「工房EBIHARA」
編集室：「多門者工房」
atelier EBIHARA



「学問は、人から人へ渡っていくもの
ですから」その言葉が、妙に心に残っ
た。



【権現堂川の風景】

取材の途中、私は守部先生に「尋ね
た。

「権現堂川には行かれますか？」

「よく行きますよ」

「勉強だけじゃないんですか？」

「もちろん」守部は笑った。

「景色を見るのも大切です」

私たちは堤の方へ歩いた。川が見え
る。空が広い。風が吹いている。

記録によれば、守部先生は1818
年(文政元年)12月に雪景色を見る
ため権現堂川の堤へ出かけたことさ
れおり、「雪中眺望の和歌が残っ
ています。

とねの水

「すじあおろそめなして
いとど真しろにふれる雪かな

守部先生の時代、現代の権現堂校堤
北の中川は権現堂川と呼ばれた大
河でした。名残の一部が、権現堂調
節池(行幸湖)です。五霞町川妻地

先で利根川の水を分派した河川だっ
たので、当時は「利根川」と呼ばれて
いました。

「雪の日は、どんな景色だったんで
しょう？」

「白くなりませう」

「……それはそうですね」

二人で笑った。

その瞬間、私は気づいた。歴史上の
偉人も、こうして笑つ。散歩もする。
景色を眺める。食事もある。

私たちが同じ「日常」を生きていた
のだ。

ただ、その日常が「百年後」には歴史
になっている。

【百年後の幸手】

取材時間が残り少なくなつた。

アプリの画面に表示が出る。取材終
了まで10分。

私は最後の質問をした。

「先生」

「はい」

「百年後の幸手を見てみたいと思
いますか？」

「百年後？」

「はい」

守部は笑った。

「よいぶん先ですね」

でも幸手という町は残っています」

守部は少し驚いた顔をした。

「それは嬉しいことです」

「先生の名前も残っています」

「私の？」

「はい」

私は伝えた。

幸手には現在も守部先生の足跡を
伝える碑が残っている。

後世の人々が先生のことを調べてい
る。

そして、今こうして私が取材に来て
いる。

守部はしばらく黙っていた。「そう
ですか」やがて、静かに言った。「そ
れなら、学問を続けてきた甲斐があつ
たのだしょう」

「嬉しいですか？」

「私の名前が残ることよりも——」
守部先生は川の方を見た。

「後の人が、昔のことを知ることし
てくれる。それが一番嬉しいですね」

私はその言葉を書き留めた。すると、
取材終了まで1分の表示。

「あ……」

もう時間がない。

「先生、最後に」

「どうぞ」

「歴史を知りたいと思っている。百
年後の若い人たちに何か一言お願
いします」

守部は少し考えた。

「よく見て、よく考えることです」

「それだけ」

「それが一番大切なことです」

アプリが震えた。

取材終了可能です。画面中央にボ
タンが現れる。

【取材終了】

私は守部に頭を下げた。

「ありがとうございます」

「こちらこそ」

私はスマートフォンを見つめボタン
を押した。

【令和の幸手へ】

次の瞬間、私は現代の幸手に戻っ
ていた。

車が走っている。

スマートフォンには現在の時刻。周
囲はいつもの風景。

「……戻ってきた」アプリには、取材
完了。

取材対象：橋守部。取材年代：文
化6年(1809年)～文政12年(18
29年)と表示されていた。

「時間……」私は時計を見た。現
代ではほとんど時間が経っていない。
まるで一瞬だった。でも、私のノー
トには、びっしりと文字が残っている。

そして私は知っている。橋守部とい
う人が、確かにこの土地で暮らして
いたことを。

【記事を書く】

編集室へ戻ると、私はすでにパン
フに向かった。最初は「橋守部は幸

手生まれではない。」その次にこう
続けた。「それでも、幸手は守部先
生の人生にとって重要な土地だった。」
この地で研究し門人を育てた。幸手
で結婚、1829年(文政12年)49歳
で家族と江戸へ移り、江戸の深川大
島町で浅草弁天山に住む国学者と
して活動続ける。

1845年(弘化2年)には著作を朝
廷へ献上している。

1849年(嘉永2年)5月24日、本所
の自宅で69歳で没している。墓は牛
島長命寺(東京都墨田区回島)。

私は原稿を書きながら思った。

年号を並べれば、人生は数行になる。
でも、実際の人生には、その間に無
数の日常がある。

幸手の道を歩いた、本を読んだ、
弟子を教えた、

川を眺めた、

考えた、

迷った、

笑った。

そいつ、時間が積み重なって、一人
の学者の人生になる。

そして、その人生が「百年後の私た
ちに残っている。私は最後に、今回の
取材を記事にまとめた。

タイトルは、「時を超える歴史散歩
幸手かわら版」(刻めぐりで橋守部
に会いに行く)にした。

記事の最後には、「幸手を歩くとき、
ぜひ少しだけ立ち止まってほしい。
見ている景色の中にも、昔の人々が
生きた時間が残っている。

その学問は幸手から周辺地域へ広
がり、やがて守部は国文学に名を残
す人物となった。」と。

「橋守部をネット検索すると、大事
な研究の時代20年を幸手で過し、
多くの地域貢献や学者として活躍
したにも関わらず幸手との関りの
記述が少ないのが残念です。

幸手桜高校の校章の由来は素晴ら
しいものでした。今に繋がる幸手宿

の誇りでしょう。

昭和3年(1928)11月に正五位
贈位を契機に、昭和4年(1929)
「橋守部翁遺蹟碑」が建てられた。

建碑と同時に、周辺は「橋公園」と
なり整備された。碑は、現在は幸手
桜高等学校の敷地の北隅に位置し

ている。

※文中写真は現存資料に則り生成AIで再
現したものです。取材はイメージ創作です
が、内容は史実に基づいています。

(共栄大学客員教授 海老原)

時を超える

歴史散歩幸手かわら版

無料ミニコミ

発行日：不定期

歴史の勉強は
暗記では無い。
興味の導火線は
幸手宿にある。

地元を知らない
もったいない。
地元自慢から始まる
グローバル。

時を歩く、
過去に会いに行こう。

幸手担当
妖子

歴史は
日常から、
出来ている。

江戸の面影が、
今もここに。

幸手宿に
住んだ有名人

幸手宿に
かかわった有名人

小さな物語が、
大きな歴史を作る。
生きた証が歴史。
生きる証が歴史を作る。

タイムリープ
できるスマホアプリ
「刻めぐり」
で取材!

刻めぐり

QRコードが
入口です!
今すぐチェック!

スマホで見るミニコミ

SNSで最新情報を発信

発行日：不定期

SNSでつながる!

今も残る、あの頃の風景。

食べて、歩いて、感じる幸手。

寺めぐり。

人が行き交う街道。

そして、未来へ。

発行 工房えびはら | 編集室 atelier EBIHARA | ※文中写真は現存資料に則り生成AIで再現したものです。取材はイメージ創作ですが、内容は史実に基づいています。

地元密着型ミニコミで、幸手から世界へ。♡